



新年度ご挨拶

新型コロナウイルスに振り回された1年が終わり、新たな年度が始まりました。

昨年度はコロナ対策のため、内視鏡検査の中止や面会者の制限、入院時の遺伝子検査など、感染対策に追われた1年でした。しかし、最近では新規感染者も減少傾向となり、医療従事者のみの対象ではありますが、ワクチンの接種も開始され、収束の兆しが見え始めてきたように思います。ただ、そのような人々の営みに関係なく、季節は確実に移っていきます。

皆様方におかれましては、気持ちも新たに令和3年度をお迎えの事と思います。

当院も消化器科専門病院としてこの地に開院して38年目、有田桂子理事長体制となり、順調に3年目を迎える事ができました。これもひとえに皆様方の支えがあったからこそと感謝しております。

当院では本年4月より、開院以来続けておりました火曜日の休診日を月曜日に変更する事となりました。しばらくは慣れないかとは思いますが、働き方改革や病床管理上の観点からの決定でございますので、ご理解を頂けたらと思います。これからも時代や地域のニーズに合わせつつ、変革を加えながら職員が一丸となり、成長を続けていきたいと思っておりますので、皆様方のご協力とご支援を引き続きお願い致します。



院長：白水 章夫

春のINDEX

- 新年度ご挨拶
- 内視鏡部のご紹介 ～内視鏡室 今昔物語～ (昭和～平成～令和へ)
- 『世相コラム』 SARSの回想録
- 新任医師紹介
- リレーインタビュー『現場のミカタ』

院長：白水 章夫

訪問診療医師：河野 昌也

外科医師：松田 佳恵

内視鏡部のご紹介 ～ 内視鏡室 今昔物語 ～

昭和 ～ 平成 ～ 令和へ



2020.1

心を添えた看護を

内視鏡室では、上部・下部内視鏡検査を約40名/日程度行っております。また、検査時間の予約制を導入して待ち時間の短縮を図り、患者さんの満足度をあげる取り組みも行っています。内視鏡技師免許取得者を5名配属して、安全、安心な内視鏡検査介助を目指しています。

有田胃腸病院を利用してくださる患者さん・ご家族の方々が安心して利用して頂けるよう、心を添えた看護を提供したいと日々努力しています。地域の病院として連携を強化し、近隣病院や、医院・クリニックさまなどからも患者さんのご紹介をいただける病院として取組んでいます。



看護副部長・内視鏡室師長
三枝 美穂



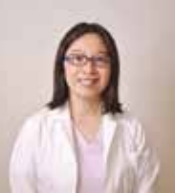
コロナ禍における内視鏡検査の必要性

新型コロナウイルスという新たな感染症の流行下において当院の特色である胃腸科での重要な検査と治療の多くを占める内視鏡診療は飛沫感染、接触感染、更には空気感染という点で感染のリスクが高い環境での診療になります。

このためコロナ感染者の増加に伴い、内視鏡検査を制限しておりました。当院では昨年4月頃から不要不急の定期検査は延期、消化器症状がある方にはまず短期間内服薬で経過をみていただきましたが、吐血・下血などの消化管出血、胃癌・大腸癌等の悪性疾患など緊急または早期に治療を要する疾患に対しては細心の注意を払い内視鏡検査・治療を行ってまいりました。

具体的な対策として内視鏡室1室に患者さん1人とし常時換気を行いオゾン空気清浄機を設置し、医療者はゴーグル・マスク・ガウン(長袖)・グローブの装着。患者さんは上部消化管内視鏡実施に際して通過孔を設けたマスクを装着する事で検査中の飛沫を予防するなど感染防御に努めております。

これらの対策を実施しながら胃カメラは1日約20件、大腸カメラは1日約15件の検査が行える体制をつくっております。必要に応じてCOVID-19(コロナウイルス)の遺伝子検査も行っております。今後もより一層安全安心できる検査体制を作り、コロナ禍でも患者さんの病気の発見・治療が遅れないよう努めてまいりたいと思っております。



理事長：有田 桂子



内視鏡室に設置している
オゾン空気清浄機

2008.2

有田毅院長(現名誉理事長)『当院における早期胃癌手術症例集』を出版

国立がんセンター中央病院 名誉院長の市川平三郎先生が序を寄せており、その中で「著者(有田毅)は、この地域の指導的・中心的立場に居られたこと、他施設から紹介された症例の多いことから察せられる。ここ数十年、わが国の胃癌死亡率が急激に減少した大きな理由の一つは、わが国で開発され普及した二重造影法や内視鏡関係の技術が、大学病院とか専門病院よりは、むしろ第一線にいる開業医が早期胃癌を見逃さない技術を身に付けて努力した成果を積み重ねて来たという外国では真似のできない姿にあると信じている。全国どこに行ってもこういう流れの中心となる施設があるものだが、それらの成績は真に尊敬に値すると思う。有田胃腸病院がそういった意味の役割をも果たして来た功績は特筆すべきことであろう。」とのお言葉をいただいた。

これからも消化器専門病院として、開業時の信念を忘れずに、内視鏡検査による胃癌、大腸がんの早期発見と治療、外科による低侵襲治療を積極的に行い、開業40年の信頼と実績に応えるべくさらなる努力を重ねていきたいと思う。



名誉理事長：有田 毅



1997.9



工藤進英先生をお招きした日の記念写真



院長：白水 章夫

当時、大腸内視鏡検査はまだ高度な技術が必要と考えられており、消化器科の医師はその技術を習得しようと躍起になっていた頃でした。

私はまだ消化器外科の研修医であり、大腸内視鏡検査の経験はありませんでしたが、第一人者である工藤先生のデモが有田胃腸病院で行われると聞き、見学させて頂きました。カメラの持ち方から進め方まで細かな所まで非常にわかりやすく説明して頂きましたが、経験のない私はあまり理解できませんでした。

実際に工藤先生の教えを実感できたのは自分で大腸内視鏡検査を行うようになった5年以上先の事でした。



大分大学福祉健康科学部 教授
医学部内視鏡診療部 診療教授
兄玉 雅明 先生

当時、健康保険南海病院(現南海医療センター)在職中であり、大腸内視鏡挿入法が学会で盛んに取り上げられた時期でした。有田毅先生が第一人者である工藤進英先生をお招きして開催された内視鏡デモに私も参加させて頂きました。先進手技を間近で拝見でき大変感謝しております。現在は大学にて消化器内科での診療、研究、また福祉健康科学部にて学生指導を行っております。

当内視鏡室では内視鏡、ヘリコバクターピロリ感染の組織学的診断を手伝わせて頂いております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



《健康診断で要精密検査と判断された方へ》

有田胃腸病院では、健診センター等で実施される職場の健康診断で【要精密検査】と判断された方の精密検査(2次検診)を受け入れています。

令和2年はコロナ禍にもかかわらず、要精密検査対象として胃については190件、大腸については233件のご紹介をいただきました。

また、平成30年より各健診センターからの2次検診受け入れのみならず、当院においても協会けんぽの「生活習慣病予防健診」実施医療機関に認定され、1次検診者の受け入れが可能になりました。

平成30年度は146件のスタートでしたが、令和元年度は341件、令和2年度は582件と着実に実施件数が増加しています。

当院及び他の健診センター受診者で【要精密検査】と指摘された方は精密検査を受けることで異常が見つかった場合には速やかな治療ができます。

精密検査の結果、異常がなかった場合も年に1回の健康診断は必ず受けるようにしましょう。

1987.4



有田胃腸病院西病棟(現2病棟)増築工事 S62.4

SARSの回想録

新型コロナウイルス感染症（COVID19）封じ込め開始後1年が経ちますが、市中至る所に並んだアルコール消毒ポンプを見ると、18年前台湾の或る医学英文雑誌に投稿した論文原稿を思い出します。

主任編集者の査読コメントが同封返送された添削原稿は高濃度アルコール消毒がなされ、異臭を放ちとても再投稿する気にはなれませんでした。結局、他の英文雑誌に投稿受理してもらいましたが、この「郵便物消毒」が当時中国南部から広がった重症急性呼吸器症候群（SARS）に対して台湾が行った苦渋の感染防止策とは、全く想定していませんでした。

SARSやCOVID19は人獣共通感染症であり、中国雲南省の某地方都市郊外に生息する蝙蝠が発生源と推定されています。1990年代、その地方都市より奥地、ミャンマー国境山岳地帯を徒歩で旅行した記憶があります。夕刻、国境に近い橋で燕と蝙蝠の大群が乱舞する光景に度々遭遇しましたが、現地で愛滋病（HIV感染症）以外、深刻なウイルス感染症流行の噂は聞きませんでした。21世紀以降の中国辺境資源開発がこの地域のウイルス個体を公の場に引き摺り出したのかもしれません。

現在、各国ともCOVID19封じ込めに梃子摺っていますが、台湾はその過去の苦い教訓から、早期より強力な封じ込め政策を行い、成果を挙げています。

本年度よりワクチン接種も始まる避坑落井な世の中で、日夜コロナウイルス感染制御に携わる多くの関係者に敬意を払い、収束の日を切望しつつこの回想録を記しました。

最後になりましたが、訪問診療科では往診の御相談承りますので、留意の程を。



訪問診療科医師
河野 昌也



2病棟看護師 川野 峰子

今年で、この病院に勤務して32年になります。

私が勤務したのは12月の冬でした。忙しい毎日で残業も多く、外科業務を覚えることに必死でした。忙しい中でも笑顔で働く先輩たちや、『ありがとう』と声をかけてくれる患者さんに元気をもらい “もうちょっと頑張ってみよう” と思いながらここまでやってくることができました。

良い事、辛い事もありましたが、今となれば懐かしい思い出です。

あと数年で定年を迎え、コロナ禍での日常生活の変化などありますが、まだまだ、この病院で働いていきたいと思っています。



インフォメーション

新任医師紹介



外科医師
まつだ かえ
松田 佳恵

〔専門分野〕

消化器外科

〔所属学会〕

日本外科学会
日本消化器外科学会
日本内視鏡外科学会

〔メッセージ〕

医師としてはまだまだ未熟ですが、患者さんの暮らしを支える医療を提供できるよう努めてまいります。

診療日程

	月	火	水	木	金	土	日
午前 8:30~12:00 (最終受付12:00)	休	○	○	○	○	○	第1・3・5
午後 2:00~5:00 (最終受付5:00)	休	○	○	○	○	○	第1・3・5

休診日

- 月曜日 ● 第2・第4日曜日 ● 祝日
- 12月30日~1月3日
- 8月13日~8月15日

2021年4月1日より休診日が
火曜日から月曜日に変更になりました

編集後記

当院での内視鏡の歴史から現在のコロナ禍における検査体制のお話。有田理事長、河野先生にも感染症の観点から貴重なお話を伺いました。当院で内視鏡検査、ヘリコバクターピロリ感染の組織学的診断でお世話になっている児玉雅明先生にコメントをいただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

内視鏡部の紹介の中での写真の中央人物、工藤進英先生(現:昭和大学特任教授)はNHKプロフェッショナル仕事の流儀「はみだし者が、道をひらく〜大腸内視鏡医・工藤進英」の中で「自分の経験と自分の知識とそれから技術と、それを総動員してかつ、その結果についてすべての責任を負える人間、それがやっぱりプロフェッショナルだと思います。」と語っています。

工藤教授らのグループは現在、内視鏡画像を人工知能(AI)で解析することで、その画像が腫瘍か非腫瘍であるかを推測し、その可能性とともに提示するソフトウェアを開発、この研究を世界に発信しているそうです。AI技術で世界の医療はこれからどう変わっていくのでしょうか。

工藤教授は3年前、有田毅先生宛ての年賀状の中で次の言葉を引き合いに、私たちがAIとどう向き合えばよいのかヒントを語っているのが印象的でした。

「変えられるものを变える勇氣と

変えられぬことを受け入れる冷静さと

そして両者を識別する知識を与えたまえ」(R・ニーバー)



医療法人 八宏会 有田胃腸病院

代 表
地域連携室

TEL:097-556-1772
TEL:097-529-8960

FAX:097-556-1778
FAX:097-529-8961